（九）黄龍山遍照寺　（神辺町西中条）

松風館に次いで多くの詩が詠まれているのが遍照寺で、その数は二十数首と言われている。遍照寺は西中条にある真言宗の寺院で、茶山詩に出てくる「黄龍山」はこの寺の山号である。

本堂の前に立つ記念碑の説明文には次のようにある。

享禄二年（一五二九）建武の中興で中条村地頭職に深水菖蒲山城主真瀬（さなせ）氏直系の出雲守信正により、現在地に遍照寺建立される。当初は興福寺と云う。
天文七年（一五三八）真瀬氏落去の後再建され遍照寺と号す。初代住職は宥朝上人、以降の上人の上人法印職に就任される方も多し。
享保十七年（一七三二）旧本堂建立される（宥智上人）。以後、約二百七十年聳立す。
寛政元年（一七八九）玄道（大空）上人、四十四歳にして亡くなる。菅茶山と親しく交友ありて遍照寺にしばしば来訪す。　（後略）

歴代上人の墓群

大空上人の墓

歴代の上人が見守る
本堂と庫裡

茶山詩碑も建っている

遍照寺への道は、現在は車で気楽に登れるが、麓から急な山道を幾たびか折れ曲がり、かなり高いところにある。その参道沿いには谷川が流れ、大きな岩や木々が点在する。茶山はこの遍照寺に度々登り、月見を行ったり、大空上人や吟友と楽しい時を過ごしている。

茶山が遍照寺を度々訪れたのは、遍照寺からの眺めが素晴らしかったこと、学僧大空上人の存在と、中条に詩を詠む吟友が多かったなどからであろう。しかし、大空上人は弟子の大了上人に寺をゆずり、高野山に登られている。寺には招魂碑が建てられ、詩一篇と詩一首が刻まれている。遍照寺に登られた際は茶山先生と大空上人の会話に耳を澄ませてほしい。楽し気な会話が聞こえてくるかも。招魂碑も見ていただきたい。

一「七月十六日同道光上人登遍照寺途中」　七月十六日道光上人と同に登る遍照寺途中
黄葉夕陽村舎詩　前編　巻二

黄昏尋寺入松栢
雲濕衣衫水鳴屐
不有月光能引人
何知臥虎是奇石

黄昏（こうこん）　寺を尋（たず）ねて松柏（しょうはく）に入れば
雲は衣衫（いさん）を湿（うる）おし　水　屐（げき）に鳴る
月光　能（よ）く人を引くに有らずんば
何（な）んぞ知らん　臥虎（がこ）の是れ奇石なるを

黄昏～たそがれ、　柏～常緑樹の総称　かしわの木、衫～衣服　下着、　屐～木製の履物、下駄
臥～ふす　横たわる
（大意）

黄昏の時遍照寺を尋ねて松や栢の木の間をたどると、お寺に雲がかかって着物がじっとりしてきた。足元では谷川のせせらぎが聞こえてくる。やがて月が出て、人や物がはっきり見るようにならなければ、道端に見えるのが、こわい虎が臥せっているのか、珍しい形をした岩が虎にみえるのかよくわからない。

二「歳杪寄大空師」　歳杪（さいびょう）大空師（だいくうし）に寄せる　　黄葉夕陽村舎詩　前編　巻一

荒歳村居事亦紛
隣閭警盗譟宵分
遥知姑射峰頭月
寺寺経聲咽白雲

荒歳（こうさい）村居事（こと）亦（また）紛（ふん）たり
隣閭（りんりょ）盗（とう）を警（いまし）めて
宵分（しょうぶん）に譟（さわ）ぐ
遥（はる）かに知る姑射峰頭（こやほうとう）の月
寺寺（じじ）の経声（きょうせい）白雲（はくうん）に咽（むせ）ぶ

歳杪～年の暮れ　大空師～遍照寺住職　荒歳～不作の年　閭～村里
紛～まぜかえす、物騒な　宵分～夜半　譟ぐ～騒ぐ
姑射峰～仙人の住むという峰

（大意）今年は飢饉で村里は事が物騒なことだ。隣村では泥棒の警戒に出てこの夜中に騒いでいる。はるか彼方姑射峰の上にはかかわりなげに月がかかっている。寺々の読経の声が白雲にむせぶように聞こえてくる。

＊詩碑の裏面に「黄龍山遍照寺釈秀傳老師秘蔵書」とあり、この詩は遍照寺に一幅の軸になっているとのことである。

三「黄龍山呈充國」　黄龍山（おうりゅうざん）充國（じゅうこく）に呈（てい）す　　黄葉夕陽村舎詩　前編　巻五

脚注

充國遊此距今二十年矣
當時唱和者篁大道
大空上人松井子璐諸人
今皆不在獨河子蘭及余存

篁大道～茶山の弟子
大空上人～遍照寺住職
矣～訓読では読まない。断定、限定、疑問反語

充國　此に遊ぶこと　今を距（へだ）てること二十年なりや
当時　唱和（しょうわ）する者　篁（たかむら）大道
大空上人　松井子璐（しろ）諸人
今は皆な在（あら）ず独（ひと）り河相子蘭及び余（よ）存す
河相子蘭～西中条村庄屋　（子蘭・子璐については後述）
唱和～相手の作った詩歌にこたえて詩や歌を作ること

長松大石舊林邱
二十餘年感壑舟
嘆息當時携手者
幾人相對説曾遊

長松（ちょうしょう）大石（だいせき）旧林邱（きゅうりんきゅう）
二十余年壑舟（がくしゅう）を感ず
嘆息（たんそく）す　当時（とうじ）手を携（たずさ）えし者
幾人か相対して曽遊（そうゆう）を説（と）かん

（大意）壑舟～壑は穴、穴の開いた舟。人の世は無常だと使っている。
曾遊～かつて遊んだ（詩を詠んだ）
昔遊んだ林の丘や長い松、大きな石を見ていると、

二十年以上経った今も変わらないことに感慨を覚える。
だが、当時吟遊した友は、ほとんど亡くなってしまった。
こうして残った幾人かで、昔を懐かしく語り合おう

【ちょっと休憩】　永富充國　宝暦七年（一七五七）～享和元年（一八〇一）
名は友。充國は字。号は亀山。通称は数馬。長門の国儒医の子として生まれる。長崎五島の藩儒なったが四十歳で致仕している。寛政十年（一七九八）黄葉夕陽村舎を訪れ講義もしている。安永七年（一七七八）永富充國、河相子蘭、篁大道などの吟友と中秋の詩会を設けており、その時のことを回想した詩である。充國は四五才の若さで、河相子璐は二八才で亡くなっており、茶山は詩をよんだ友が次々世を去ってゆく寂しさを詠んでいます。
「嘆息當時携手者」とあり、茶山先生のため息が聞こえてくるようです。

【ちょっと休憩】　道光上人　延享三年（一七四六）～文政十二年（一八二九）
諱は日謙、字は道光、聽松庵と号す。大阪の生まれで、京都本国寺で修行。出雲の平田の法恩寺の住職。上人は度々茶山を訪ねており、長逗留もあったらしい。茶山は上人と一緒に諸方に出かけて共に詩を詠んでいます。茶山と気があったのでしょう。

四　「所見」　黄葉夕陽村舎詩　前編　巻二

登山待月生
夕陽紅未衰
上上身漸高
月在歸禽背

山に登りて月の生（う）まるるを待つ
夕陽（せきよう）　紅（くれない）未だ衰（おとろ）えず
上（のぼ）り上（のぼ）りて身は漸（ようや）く高し
月は帰禽（ききん）の背に在り

帰禽～ねぐらに帰る小鳥
（大意）　略

五　「次韻大空上人感事作」　大空上人の事に感じての作に次韻す　黄葉夕陽村舎詩　後編　巻二

人間毀譽鎮啾啾
偶入閑聽亦作憂
轉羨山中無暦日
何曾皮裡有陽秋

人間（じんかん）の毀誉（きよ）　鎮（しず）まって啾啾（しゅうしゅう）
偶（たま）たま閑聴（かんちょう）に入るも　亦た憂いを作（な）す
転（うた）た羨（うらや）む　山中（さんちゅう）暦日無きを
何ぞ曽（かつ）て皮裡（ひり）　陽秋（ようしゅう）有らんや

（大意）　人間～世間、世の中　毀譽～謗ること、誉めること　啾啾～低い声が長く尾を引いてほぞ細と続くこと　山中無暦日～世間のあくせくした生活に関係ない　皮裡～皮かぶりをして中身を隠していること　陽秋～春秋
世の中のほめたりくさしたりは鎮まったが、低い声は耳の底に細々と長く続いている。その声がたまたま聞こえないようになれば、また、どう思っているのだろうと気になる。
山の生活には暦は必要なく、世間のあくせくした生活に関係ない暮らしをして

おられることが、いよいよ羨ましい。どうして皮かぶりをした中へ、ふたごころをかくすことがあろうか。

六　「遍照寺」　　黄葉夕陽村舎詩　後編　巻二

撫松拜石入雲霞
滿路清風紫楝花
香篆艾烟岑寂甚
緑陰堆裡病僧家

松を撫（な）で　石を拝して　雲霞（うんか）に入る
満路の清風（せいふう）　紫楝（しれん）の花
香篆（こうてん）　艾烟（がいえん）岑寂（しんじゃく）甚し
緑陰（りょくいん）堆裡（たいり）病僧（びょうそう）の家

楝～センダンノ木　紫の小さな花をつける　艾烟～お灸のもぐさで、その煙
岑寂～ひっそり物静かなこと　緑陰～緑の陰がうず高く堆くある状況

（大意）　立派な枝ぶりの松、形のいい石などをみながら霞のかかったような遍照寺の参道を登る。センダンの木々が紫の花をつけた枝がいっぱい広がり、花の匂いを含んで清らかな風が吹いている。上人の枕元の香炉から、お灸のような烟がゆらゆらとたちのぼっておおり、緑の陰がふんだんにある部屋で養生されている。

【付録一】遍照寺に関わる詩を追記する（大意は省略）

「黄龍山」　　黄龍山　　黄葉夕陽村舎詩　前編　巻三

來時望衆峰
奇絶令人躍
來顧來時路
郊原亦不惡

来時（らいじ）　衆峰（しゅうほう）を望めば
奇絶（きぜつ）　人を躍（おど）ら令（し）む
来たって　来時（らいじ）の路を顧（かえり）みれば
郊原（こうげん）亦（ま）た悪（あ）しからず

衆峰～まわりの山々　奇絶～絶景　郊原～町はずれ、国境。遍照寺にのぼったら神辺平野のながめがよかったのでしょう。

「登黄龍山」　　黄龍山に登る　　黄葉夕陽村舎詩　後編　巻二

彩翠糢糊晚照春
不知何處是黄龍
狂謌直蹈危巖上
屐底驚濤萬壑松

彩翠（さいすい）　糢糊（もこ）として晩照春（うすづ）く
知らず　いずれの処か　是れ黄龍
狂謌（きょうか）　直ちに踏む　危巖（きがん）の上
屐底（げきてい）　濤（なみ）に驚く万壑（まんがく）の松

春～臼で穀物をつく。太陽が没する、日が入る　狂謌～戯れに歌う歌、冗談詩、
危巖～危なげに重なっている岩　屐底～下駄の底　壑～谷
濤～松を上から見ると波を打ったようにみえるさまを波にたとえている

参考文献

茶山詩話　菅茶山先生遺芳顕彰会
郷土ゆかりの人たち　菅茶山記念館ホームページ
茶山詩　五百首　島谷真三・北川勇　児島書店
菅茶山顕彰会会報　菅茶山顕彰会
黄葉夕陽村舎詩　栗田　豊
黄葉夕陽村舎詩　復刻版　児島書店
教育者　菅茶山　菅茶山記念館
菅茶山遺稿集　柏木順子　大平文庫